

マーケット概況（2019年5月）

5月連休明けの債券相場は、米中貿易摩擦への懸念が高まったことから買いが優勢となり、10年354回債の利回りは-0.060%で始まった。8日に行われた10年債入札が軟調な結果となり、10日には10年354回債の利回りが一時-0.045%まで上昇したが、同日午後米国対中関税が25%に引き上げられると買い戻される流れとなった。14日には日経平均株価が3年1ヵ月ぶりに7営業日続落となったものの、債券相場は方向感に乏しい展開が続き、債券先物6月限は152円70銭台のレンジ内で膠着した。その後は20日に発表された1～3月期の国内GDPが好調な内容となったことから一時的に売られる場面も見られたが、22日の20年債入札の応札倍率が過去最高の5.47倍となるなど順調な結果となったことから買い戻され、米中貿易摩擦の長期化懸念も相俟って相場は堅調に推移した。28日に行われた40年債入札が堅調な結果となり、29日に米国長期金利が2.2%割れと2017年9月以来の水準まで低下すると相場は騰勢を強め、10年354回債の利回りは約2ヵ月ぶりに-0.100%まで低下した。月末にかけては米墨貿易摩擦からリスクオフの動きが加速し、20年168回債の利回りは一時0.290%と2016年8月以来の水準まで低下したが、月末に発表された翌月の日銀オペ運営方針で超長期ゾーンの買入回数が4回から3回に減らされるとイールドカーブのブルフラット化は一服し、10年354回債の利回りは-0.095%で月内の取引を終えた。

<短国市場>

前半は大型連休明けで入札が連続したものの、3M金利は-0.1%台半ばで安定して推移した。8日の3M829回債入札では最高落札利回りは-0.14%台となり、10日の3M831回債入札では投資家需要により-0.15%台に低下した。新積み期となってもGC金利が-0.11%台から大きく低下しなかったことや業者の在庫余剰感から17日の3M833回債入札、24日の3M834回債入札と続いて最高落札利回りは-0.14%台に上昇した。月後半からは海外投資家を中心とした需要により需給環境が好転し、31日の3M835回債入札では再び-0.15%台に低下し、セカンダリー市場では-0.158%で取引を終えた。

<一般債市場>

新発10年政保債は起債スプレッドが国債カーブ+8.5bpと前月比0.5bp縮小したものの、起債額が道路機構債の100億円のみと大幅に減少したことから販売は好調だった。10年地方債は前月比同水準の同+15.0bpとなり、クーポン水準も前月債並みの0.10%近辺だったことから概ね順調に消化された。5年地方債は前月と同じ0.01%クーポンで決定し引き続き需要は旺盛だった。既発債は金利低下を受けてスプレッドが若干拡大したものの、需給に大きな緩みはなかった。社債は格付けよりも利回り水準が重視され高クーポンの銘柄や超長期債への需要は旺盛となり、発行額は8,050億円と同月対比としては2003年以来の高水準に膨らんだ。また、国内事業会社として初めてANAホールディングスがソーシャルボンドを発行し国連のSDGs達成に向けた取り組みが好感され投資需要を集めた。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#354	-0.060(7日)	-0.100(29日)	-0.045(10日)	-0.095(31日)
#353	-0.075(7日)	-0.110(29日)	-0.060(10日)	-0.105(31日)
#343	-0.165(7日)	-0.185(30日)	-0.150(20日)	-0.185(30日)
#139(5Y)	-0.180(7日)	-0.200(31日)	-0.160(20日)	-0.200(31日)
#168(20Y)	0.350(7日)	0.290(31日)	0.365(10日)	0.300(31日)
#830TDB(6M)	-0.149(9日)	-0.165(27日)	-0.149(9日)	-0.165(27日)
#828-#835TDB(3M)	-0.180(7日)	-0.180(7日)	-0.145(8日)	-0.158(31日)